

令和六年度 西郷隆盛をしのぶ書道展課題

〈和歌の課題〉半紙・条幅(半切)

諸人の誠のみつる船なれば ゆくもかへるも神やまもらむ

※出典『大西郷書翰大成 第五巻』

(口語大意) 文久三年(一八六三)十一月沖永良部島での作と伝えられる。

この船は多くの人の誠が満ちている船であるから、往復ともに神の御加護があるのはまちがいない。

〈漢詩の課題〉半紙・条幅(半切)

五言律詩

寄村舎寓居諸君子

村舎寓居の諸君子に寄す

躬耕將曉初  
何用釣虚譽  
壘上鍊筋骨  
燈前照讀書  
昔時常運甕  
今日好揮鋤  
更要知眞意  
只應非種蔬

躬耕は曉を將て初む  
何ぞ虚譽を釣るを用いむ  
壘上筋骨を練り  
燈前讀書を照らす  
昔時常に甕を運び  
今日好んで鋤を揮う  
更に眞意を知るを要す  
只応に蔬を種うるのみに非ざるべし

(口語訳) 自分で田畑を耕すのは夜明け方にはじめ、何でつまらぬ体裁、外聞のよさを求めることがあろうか、そんな必要はない。日中は畑のあぜのほとりで逞しく体を鍛え、夜はとももし火の下で読書にいそしむ。昔、陶侃という人は朝晩瓦を運んで体を鍛えたが、今諸君は自分から好んで鋤をふるって体を鍛えている。然し、諸君は更に進んで農耕の眞の意味を知る必要がある。それは只単に野菜を作るためだけでないだろう。国家有事のため心身を鍛えているのである。

〔明治八年(一八七五)頃の作と思われる。〕

○村舎寓居 村の宿舎。吉野開墾社の宿舎である(七六参照)。寓居は仮住まいの意。○諸君子 若い開墾社の皆さん。陸軍教導団(下士官)一五〇名といわれる。○虚譽 虚しい、つまらぬ名誉。○何用 反語表現。○壘上 畦の辺り。○燈前 云々 灯火の下で読書する。○昔時 云々 晋の陶侃(陶淵明の先祖)が国政に耐えるには体力が必要だと、毎朝百枚の瓦を庭に運び出し、毎晩それを屋内に運び入れて鍛錬したという故事。○應非 きっと……ではないだろう。○躬 躬(七六に既出)。

〔西郷は武屋敷から吉野寺山まで、三里の道をよく通っていた。吉野雀ヶ宮に家一軒買っていた。現在、寺山には巨大な開墾碑が建っている。〕

七言律詩

遊 赤 壁

赤壁に遊ぶ

赤 壁 誰 爭 山 水 清  
難 比 千 古 蘇 功 名  
早 帆 衝 雨 潮 聲 急  
暗 霧 圍 峰 震 霹 轟  
浪 碎 周 郎 疑 激 戰  
雲 晴 蘇 子 寄 風 情  
豈 圖 此 夕 逢 春 暖  
直 棹 孤 舟 乘 月 行

赤壁誰か山水の清きを争わむや  
比し難し千古功名を著わすに  
早帆雨を衝いて潮声急に  
暗霧峰を囲んで震霹轟く  
浪碎けては周郎激戦するかと疑わしめ  
雲晴れて蘇子風情を寄す  
豈図らむや此の夕べ春暖に逢わむとは  
直ちに孤舟に棹さして月に乗じて行く

〔口語訳〕 一体誰が赤壁と他とその山水の清らかさを競い合わせることができよう、誰もできない。それほど赤壁はすばらしいのである。又、大昔から手柄をあらわす所として赤壁に比べられる所はなかなかあるものではない。雨をもともせず早舟を出すと、潮の音が急に高まり、暗くたちこめた霧が山々をとりまいて雷の音がゴロゴロと激しく響いてきて浪が碎け、呉の周瑜が魏の曹操と激戦するかと人を疑わせるし、雲が晴れると、宋の蘇東坡が「赤壁之賦」の趣をもたらししてくれる。今夜こんなに春の暖かさに出遇うとは思ひもなかった。そこですぐさま又一そこの小舟を漕ぎ、月の美しさにひかれて水上を思うままに進んで行くのである。

〔この詩は、場所はよく分らないが、錦江湾周辺の景観をベースにした擬詩であろう。〕  
○赤壁Ⅱ長江（揚子江） 左岸湖北省にある古戦場。三世紀初め、呉の周瑜が率いる呉蜀連合軍が魏の曹操軍を迎え撃ち大勝した所。十一世紀初め、宋の蘇東坡（名は軾）がここに遊び、有名な「赤壁之賦」を作った。○早帆Ⅱ速い帆船。○震霹Ⅱ雷鳴。○周郎Ⅱ周瑜のこと。○蘇子Ⅱ蘇東坡のこと。第五句、第六句はそれぞれ周郎、蘇子を主語にした表現であるが、つまりは「周瑜が曹操と激戦するのではないかと目を疑い、蘇東坡の赤壁之賦の趣になって来た」の意である。口語訳は直訳しておいた。○豈図Ⅱ反語表現。「詩の出典Ⅱ（全）、（原）、（題）」

七言絶句

偶 成

偶 成

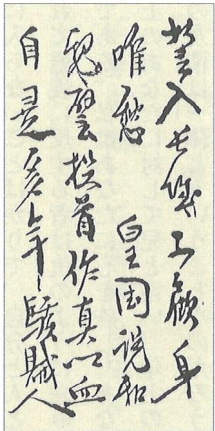
誓 入 長 城 不 顧 身  
唯 愁 皇 國 說 和 親  
譬 投 首 作 真 卿 血  
自 是 多 年 駭 賊 人

誓つて長城に入りて身を顧みず  
唯皇国を愁えて和親を説く  
譬首を投じて真卿の血と作るとも  
是より多年賊人を駭かさむ

〔口語訳〕 和親成就を心にきめて長州城に赴き、わが身のことはさておいて、ただ皇国の為を思い、長州と幕府との和親を説こうと思う。たとい、事ならず首をさしのべて顔真卿のように血を流すことになっても、それからはいつまでも長く国賊どもの心をおどろかしてやろう。

〔元治元年（一八六四）三十六歳の十月、征長総督徳川慶勝のもと参謀となり、一任を得て和親工作の為長州に遣わされた時の作である。〕

○長城Ⅱ長州城。○眞卿Ⅱ顔真卿。



（館）